

学位論文題名

『万葉集』における亡妻挽歌の諸相

学位論文内容の要旨

本論文は、いわゆる「亡妻挽歌」の作品系列に属する代表的な四挽歌作品をとりあげ、本来は個人的なものであるはずの「悲哀」の感情を第三者たる享受者につたえるために、各作品においてどのような表現の工夫がなされているのかを検討し、万葉和歌史において「亡妻挽歌」がうたいつがれた意義をさぐったものである。

第一章では、亡妻挽歌の嚆矢とされる柿本人麻呂作「泣血哀慟歌」について検討する。この作品は二群の長歌作品からなるが、本論は、両歌群をつらぬく「春」と「秋」の対比による死生観と、「妻」のすがたをおいもとめながらもそれがはたせないというモチーフの存在をみいだすとともに、両歌群が相互補完的な関係にあることを主張する。また、亡妻挽歌とはことなる系列ともいふべき「殯宮挽歌」でもちいられた、のこされたものの悲哀の描写を徹底したものが「泣血哀慟歌」における「我＝夫」の形象であり、また、「妻」をのこしてたびだつ「我」をえがいた「石見相聞歌」に対して、「妻」にさきだたれた「我」をえがいたのが本作品である、という観点から、両作品のつながりを指摘し、さらに、「我」の悲哀表現のあくなき追求は、この挽歌が広範な享受者層を意識してつくられた作品であったことをものがたるものであると結論づけている。

第二章の「日本挽歌」では、前代の「泣血哀慟歌」とはことなる「亡妻挽歌」をめざした結果としての構成意識が、和歌に漢詩文を前置し、さらに反歌を五首付すという独自の構成をもたらし、さらに、遺族になりかわってよむという発想にもそれがあらわれているとする。また「日本挽歌」には先行挽歌作品からの単純な表現摂取はすくなく、従来先行する挽歌の模倣とかがえられてきた長歌後半部の表現についても、妻の死を自分に対する「裏切り」ととらえ、死者をせめるという逆説的な悲哀表現は、こうした意識にもとづくあたらしい挽歌的抒情の方法であったと指摘する。

第三章では、前章で検討した「日本挽歌」の継承から誕生したとかがえられる「大伴旅人亡妻挽歌群」を分析する。この短歌群には「日本挽歌」に対応している部分がおおくみられ、特に、時間という観点からみたとき、「日本挽歌」でえがかれた時間構成の意識を継承したものが「旅人亡妻挽歌」であり、この両者は共通のかぎられた享受者を想定した挽歌であったと指摘する。また、この短歌群は「亡妻哀悼」という主題をもつ構成的な歌群とみなされる一方で、実感的・即興的によまれたものという説もねづよくあるが、本論文は、従来指摘されてきた筑紫詠のみならず、帰京途上の詠五首についても、これを歌群のむすびの三首がうけとめる緊密な構成になっていることが確認でき、周到に構成された歌群であることがうらづけられるとする。すなわち、本作品は、「旅」にまさる「家」での「苦し」さをよんだむすびの三首にむけて、次第に「我」の悲哀がたかまっていくことを、「涙」と「心」の変化によってえがく、すぐれて構成的な歌群であった、というのが結論である。

第四章でとりあげる「悲傷亡妾」歌群は、先行作品からの表現摂取がおおいことが指摘されているが、近年はそれを単なる模倣としてではなく、家持の「歌まなび」の一環として肯定的にとらえようとするのが潮流になっている。本論はそうした研究の傾向にそいつつ、「歌まなび」をへて、当該歌群が「亡妻挽歌」にもたらした新趣向として、「我」の悲哀を身体的な苦痛をともなう悲哀として表現したこと、悲傷が断続的になりゆくことをしめした「思ひ出づ」という表現によって、これ以前の挽歌が対象としえなかった長期にわたる悲哀をえがこうとしたこと等を、あたらしいころみとしてみいだす。また、「時」の経過にともなう悲哀の変化をよみこんだ構成は「旅人亡妻挽歌群」からの影響ともかがえられているが、旅人作品がつよい悲哀でむすぶのに対して、当該歌群では、悲哀が

終息する時点までの期間をよんでいるのが独自の点であることを指摘している。さらに、歌群の主要な舞台が「我がやど」であり、よまれている景物もその「我がやど」の「なでしこの花」であり、最後の二首においても「佐保山」という大伴家にゆかりの地がよまれ、さらに「即和」したのが弟書持だということから、大伴家という限定された享受者層を意識した挽歌である可能性をかんがえる。

以上の検証の結果、本論は、四作品に共通して指摘できるのは、愛するものへの哀悼の意よりも「我」の悲哀をよむことの方がむしろ中心となっていることであるとし、それはむしろ、最終的には亡妻を哀悼することにつながるものの、一方では、享受者に自己の悲哀を共感させようとつよく意識していたためであるとする。そして「亡妻挽歌」の「夫」の悲哀は、「ますらを」のそれであるが、「ますらを」たるものが自己の「恋心」をおおやけにすることができる唯一の機会が、愛する存在の「死」を通じてはじめてうたいえた挽歌であったともいえ、そこに万葉和歌史において「亡妻挽歌」がうたいつがれた要因のひとつがあった、とする。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである。（４００字詰原稿用紙換算約５５２枚）

序章

第一節 『万葉集』の挽歌	…… 1
第二節 検討の方法	…… 3

第一章 泣血哀慟歌

第一節 はじめに	…… 9
第二節 A歌群の表現世界	…… 12
第三節 B歌群の表現世界	…… 23
第四節 まとめ	…… 36

第二章 日本挽歌

第一節 はじめに	…… 42
第二節 誰に対する挽歌なのか	…… 43
第三節 前置漢詩文の役割	…… 47
第四節 題詞「日本挽歌」について	…… 51
第五節 長歌の表現世界	…… 53
第六節 反歌五首	…… 69
第七節 まとめ	…… 71

第三章 旅人の亡妻挽歌

第一節 はじめに	…… 75
第二節 Aの表現世界	…… 80
第三節 Bの表現世界①—輛の浦—	…… 82
第四節 Bの表現世界②—敏馬—	…… 88
第五節 Cの表現世界	…… 90
第六節 日本挽歌との対応関係	…… 96
第七節 亡妻挽歌の系譜において	…… 98
第八節 まとめ	…… 99

第四章 「悲傷亡妾」歌群

第一節 はじめに	… 102
第二節 ①～③の表現世界	… 103
第三節 ④～⑧の表現世界	… 107
第四節 「悲緒未息更作歌五首」の表現世界	… 113
第五節 まとめ	… 127

終章

第一節 先行作品からの受容と独自性	… 132
第二節 構成方法	… 134
第三節 享受者の存在と虚構性	… 136

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽

副 査 教 授 富 田 康 之

副 査 教 授 須 藤 洋 一

学 位 論 文 題 名

『万葉集』における亡妻挽歌の諸相

審査委員会は、本論文が提出されて以後たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また口答試問を実施して、十分に審議をかさねて適正な評価につとめた。その結果、以下にのべるような本論文の評価にかんがみ、全員一致して、原田直保美氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して文学研究科教授会に報告した。研究科教授会はこの報告にもとづき審議をかさねて、これを承認したものである。

本論文は、万葉集の挽歌作品のうち、「夫」のたちばから「妻」の死をいたむ、いわゆる「亡妻挽歌」の作品系列に属する代表的な四作品をとりあげ、本来は個人的なものであるはずの「悲哀」の感情を、たんにみずからの「心遣り」としてでなく、一般的・普遍的なテーマとして、第三者たる享受者につたえるために、各作品においてどのような表現の工夫がなされているのかという観点から、先行作品および漢籍からの表現の摂取や、それをふまえての独自の達成を具体的・実証的に検討し、万葉和歌史において「亡妻挽歌」がさまざまにうたいつがれていった様相と、その意義とをさぐったものである。したがってそこでとられた分析の方法は、表現分析を主としたオーソドックスなものであるが、先行研究が等閑視していた表現の細部にわたって用例調査を徹底させるなどして、従来の通説的なよみをのりこえ、あるいは補強することをめざしている。

本論文の、挽歌の哀傷表現の一語一語の意味内容を着実においつめていく堅実な分析手法には説得力があり、単独の論文として公表された部分は、学界時評等でも好意的に評価されている。また、先行研究を十分に消化して、論点・対立点等を的確に把握して論述をすすめている点も評価できる。しかし、その一面で、先行研究に配慮するあまり従来の論議のわくぐみにとらわれて、それをおおきくうちやぶる大胆な新説を提示するというような魅力にはとぼしい、漢籍のあつかいという点にいささか慎重をかくところがある、というような問題点ものこしている。ただ、これらも、同氏が自立した万葉研究者としてたつ際の決定的なマイナス要因となることはなく、今後の自覚的なとりくみによって十分に克服できるものと判断されるものである。

本研究のおおきな成果として、とくに第三章であつかった「大伴旅人亡妻挽歌群」論は、従来の研究で死角となっていた全体の構造把握に新機軸をみせ、論点の対立に終止符をうちえたといえ、この論文によっておおきく研究が前進することはまちがいない。また、第四章の「悲傷亡妾歌群」の、終局部の短歌群を中心としたあたらしい視点からのよみも、この作品の研究をおおきくひらく可能性を有している。人麻呂作品をあつかった第一章、憶良作品をあつかった第二章についても、それぞれ新見を提示して、従来の研究成果をのりこえる確実なあしがかりをえたと判断される。そして、本研究

によって、亡妻挽歌研究がまたひいては万葉挽歌研究が、全体としてより精度をまし、堅実な進展をみせることが期待できる。